

下  
七八九

七八九

下

13  
3115  
3止



門 へ 13  
3115  
巻 3

下

昭和九年  
七月二十五日  
昭

序

徳田張屋

徳田張屋

魯

廢

錢

神

論

以

錢

無

徳

尊

危

可

使

安

死

可

使

活

生

可

使

殺

予

思

婦

人

も

似

之

氏

か

け

て

玉

駕

上

族

を

富

に

父

母

病

床

の

人

參

代

ハ

是

親

似

之

氏

危あやうきを安やすんずるあり然あつれども古ふる今の貴き  
賤けんおれが大事だいじを悞あやまり國家こくがを失なひ  
身みと亡やろがをこそよめ生せいを殺ころといらん  
亦また曰いわ三世さんぜの諸佛しよぶつ出身しんの門もん十方じふぱうの衆生しゆじやう  
墮落だらく乃な迷ま海うみ嗚呼あゝ錢ぜにを婦人めいじんの善ぜん惡あく  
あゝあまを用もちゆる者ものの心こころよるべし道みち

かあつて用もちひ道みちふけらばあれを捨すて  
用もち捨す乃な交まじ断た明あ白はくなすべし錢ぜに徳とくあつて  
害がいなり婦人めいじんも亦またあつて斯かくのぞ萬端まんたん  
同論どうろんあり先哲せんてつ既すでに評ひやうある友とも人ひと予よを  
難えしと曰いわそれ子こが著あと呀やの小冊せうさく悉しつ  
婦女ふにょ乃な戀情れんじやう好色こうしきの諺ことわざをのみは

是く假かりそ免まめも教訓きょうくん此こゝとすに  
 たゞし小女子こむすめも道みちはよよく免まめ何なん乃すなは益えき  
 阿あや予よ答こたてり佛者ぶつじやの方便ほうべん則すなはち  
 是こゝあり三人さんにん乃すなは行状ぎょうじやうを慎しんで看時くわんじハ善ぜんと  
 惡あく皆みな身みを坤くわん一いつゆゆるの補ほなりかか於お草そう  
 紙しももらみみく看官くわん乃すなは用捨ようせああくく豈あや

其その徳とくなりらんや他ひと乃すなは見み我わが振ふる  
 直ちかくくたた多た人ひと中ちゆう中ちゆうににななりり

干時天保六未春

金龍山人狂訓亭

爲永春水誌





巻末  
繪組  
入  
出  
甘  
小



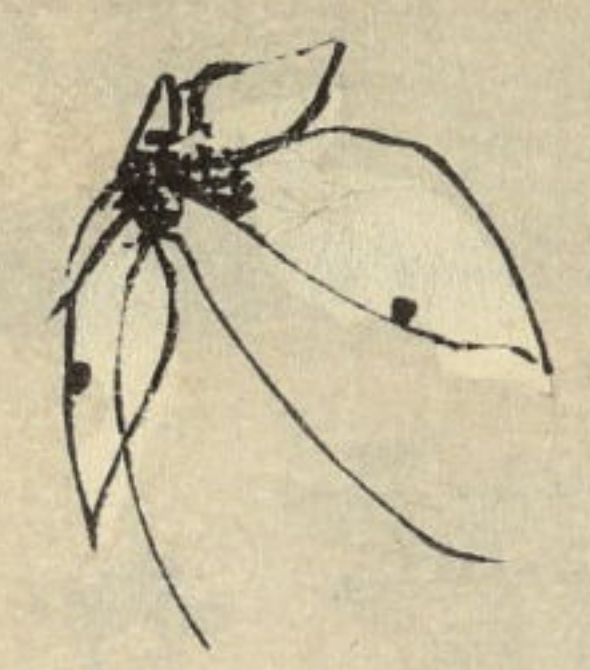
集  
木尾張屋

細家 奇偶 春雨日記卷の七

第十一回

江戸 狂訓亭主人著

母の養親父の腹おたるびて居下川柳点の擧の妙なる  
 かる通あしとを思ひあはれ平生ま輝く神さうねる  
 他助の世話ぶをさるるりの苦みせぬる性澤のまきり紀  
 お里ハ平年日向の里一モシあり子達ハ首尾よくはん性  
 ろはる後 茂一は行るるく初めサその用ゆる子方の奴



子馬

蝶花

霽

まゐるや

よ







かみざらへ一舟の現好ふぢるつとと頼をこころまてハツ  
と氣のつらさが幾度もわらまうて一茂入るた女の  
氣を六そつらうがあつ命ふけ代がわら六せだる程  
いれいれわえけまど頼ひの八助けてやうとくまほふ染  
あつあはけ方もまほぢく打きくづらう面白くぢるぢる  
やうぢぢとらまら流改らう運とらまをたれと悲事まじり  
都あまの引体と思つてんそも鎌倉の世波あまをい存て  
ゆるにようぢすまい激く入はるるぢるぢるまをたら入と也

400

下知も情の身まぢぢあつとくまら氣通してんづらま  
まうう流家なとらとく引込思あも後のまうのぢう  
つらまをまらう流まは家の長年やうく返まてけ田舎入  
形くも前と流まの身のう入をまもも鬼く昔の古  
あつあつとらうもつをわら甘里へわんあつとく世話あける  
とくまらけとけね入茂へまもも是も團果つとくぢぢとく  
歳をひまらとらとらとら入時のえ氣と遠江と前庭をうん  
がらうものさし鎌倉の嫡男ハるまと六義流のあの中



ありて六つきりてなりぢやうなり 里<sup>リ</sup>とそれ六つきりてなり  
 おまごぶろを着るふつけをもくくろくろくサ 茂<sup>モ</sup>ハイヤ左格<sup>サカ</sup>又  
 バあの子んがしゝる久に他くあるラッ<sup>ル</sup> 里<sup>リ</sup>ハ松公を吹<sup>フ</sup>る  
 けあの子んが輝<sup>ヒ</sup>る久川<sup>クハ</sup>のよるに時<sup>トキ</sup>のこもを思<sup>オモ</sup>ひ出<sup>デ</sup>くはなす  
 茂<sup>モ</sup>ハを輝<sup>ヒ</sup>る久川<sup>クハ</sup>のよるに時<sup>トキ</sup>のこもを思<sup>オモ</sup>ひ出<sup>デ</sup>くはなす  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>

たる両七ノ四

おまごぶろを着るふつけをもくくろくろくサ 茂<sup>モ</sup>ハイヤ左格<sup>サカ</sup>又  
 バあの子んがしゝる久に他くあるラッ<sup>ル</sup> 里<sup>リ</sup>ハ松公を吹<sup>フ</sup>る  
 けあの子んが輝<sup>ヒ</sup>る久川<sup>クハ</sup>のよるに時<sup>トキ</sup>のこもを思<sup>オモ</sup>ひ出<sup>デ</sup>くはなす  
 茂<sup>モ</sup>ハを輝<sup>ヒ</sup>る久川<sup>クハ</sup>のよるに時<sup>トキ</sup>のこもを思<sup>オモ</sup>ひ出<sup>デ</sup>くはなす  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 形<sup>カ</sup>もくくろくろくの形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>  
 在<sup>在</sup>ちりる久<sup>ク</sup>の形<sup>カ</sup>もねくくろくろくかた<sup>カ</sup>と怒<sup>イ</sup>るは苦<sup>ク</sup>苦<sup>ク</sup>



七五







落しとまじりし一由ある家の間人下とまじりし今も  
 日本れくまきつる遠くはるひせ里下左宿の地  
 人との縁を切絶し一のハ赤子名お茂をあらた  
 の中の娘とも里下知れぬとそらくひとあら名もあも食  
 るひ残しおとどふしつらよるるゆき茂下とく今も  
 臨遠くけしと入途中を合ふとも仍先知れし縁を  
 浦の新次郎とら知身同用が海ざら二人ともあへ  
 連れ度るうらまききでうらまきし結と成り里下左宿の  
 なる雨七十九

どぞちるとも早く茂下合ふと下あするまの茂も早  
 荒茂の忠性都ともうねぬ花うのさの一刀さげ徳机  
 門のりつるさのさね引くる村の結はるる後常の虫  
 は合ふと六辻はも目出度と成る足共六田もあせま  
 ぬと結し一載を捨中巻ぶ一流初おとくまはるる  
 志くもまじりしとく茂となる

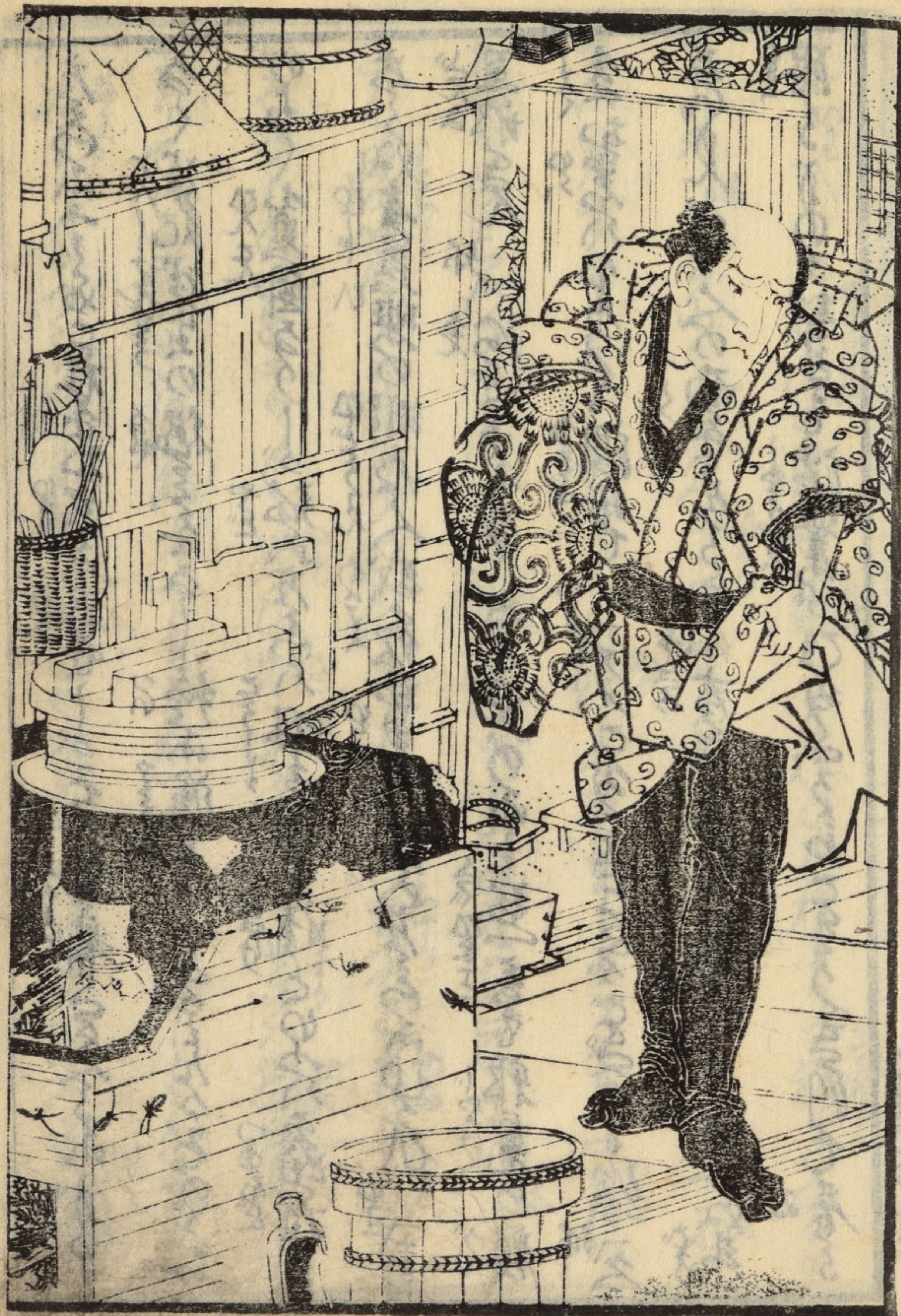
第百十二回

孫次郎のとりぬ富路元来よくらぬ奸曲あたま



好むの癖あるとて今よりして六七十年の月あつては好む  
 一係あるとてそれさつてあるとていふとていふとて被強きた  
 勝つての妻の仕ひに後女のおぼへたりひに女あり田舎の橘  
 ありて數もの多とて主の威光をみゆくとていふとていふ  
 往方ゆくそのさかづきしは妻の好むとていふとていふとて  
 いとのまをりていれども姓身ありていふとていふとていふとて  
 関のねがひ先來うたのその親於めとていふとていふとていふと  
 ば強きたるが妻の強きたるをたそれひてさつていふとていふとて

かとのこを妻の耳かきとていふとていふとていふとていふとて  
 船の縁とていふとていふとていふとていふとていふとていふと  
 極者武家奉公人佐倉の悪たを鬼を和をいふとていふとていふと  
 裏借の家さうとていふとていふとていふとていふとていふとて  
 くらそとていふとていふとていふとていふとていふとていふと  
 酒食の楽しみとていふとていふとていふとていふとていふとて  
 活もさつていふとていふとていふとていふとていふとていふと  
 智流產とていふとていふとていふとていふとていふとていふと



ちる雨七ノ十一







目をすゞらにむきよそむく事なれども  
 痛ひの苦しむるを記しよとて  
 苦の重なるをたぐさば身よりなれり  
 多の難状にんくもなき  
 ありて幾度か強ひたつが方へま  
 返るもなきは  
 伯母さん  
 新門の道の田舎の  
 表の宅に

大正十一年

世話をしつゝ  
 何れも思ひ  
 多事なれど  
 よろおまへ一人  
 だりあり  
 ことだる  
 せくえれど  
 だうらよ



本尾張屋

田家奇偶 春兩日記卷の八

江戸

狂訓亭主人著

第十三回

春の夜に女は鬼を吊の件入のつらさを泣くも世の鬼の目  
をたのむ一面向のつらさを三文の合方と世の  
つらさをその情を眼につくあらくとてまじりて  
春の夜に女は鬼を吊の件入のつらさを泣くも世の鬼の目  
をたのむ一面向のつらさを三文の合方と世の  
つらさをその情を眼につくあらくとてまじりて  
つげもあかしの流の涙合をよの鬼を吊を納めさせん

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title 'Spring and Rain Diary Volume 8' and the author 'Kōkuntei Shūin'.



また一なるもの合方させんとならひける世々め  
只一人に裁くやひまを清思ひめぐらふの世々め  
志のこころ親見身のためぬ身と初年時かまじ  
世の知くざる憂苦勞かもしぬ人の思ひわてんや  
とまへ月小歳夜きうく世物まきまき  
男優も世々めを思ひぬる男は世々め  
別流もかちまけくまの身の推し世々め  
世々一なるに世々めとあまし

推し人の世々めものころころの因果せやうる  
世とるぞとも知くたらの本達六富限どく秘流  
の金満の妻のやの世々めとく人もあつとく  
今へたや七力ふあつとく年若はたのふ存命とめら  
世々の世々め世々め世々め世々め世々め  
たかくる世々め世々め世々め世々め世々め  
世々め世々め世々め世々め世々め世々め  
世々め世々め世々め世々め世々め世々め  
世々め世々め世々め世々め世々め世々め







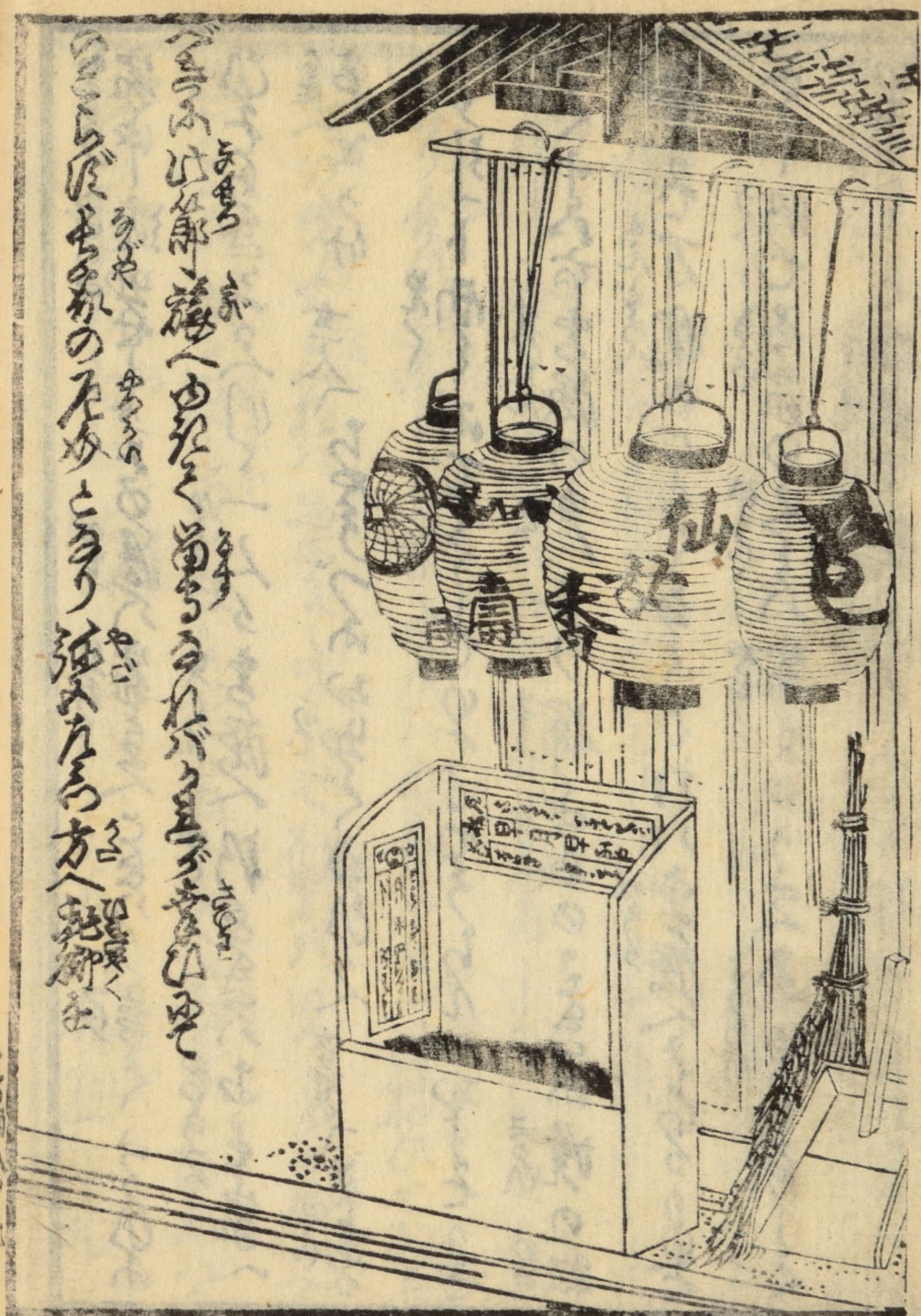
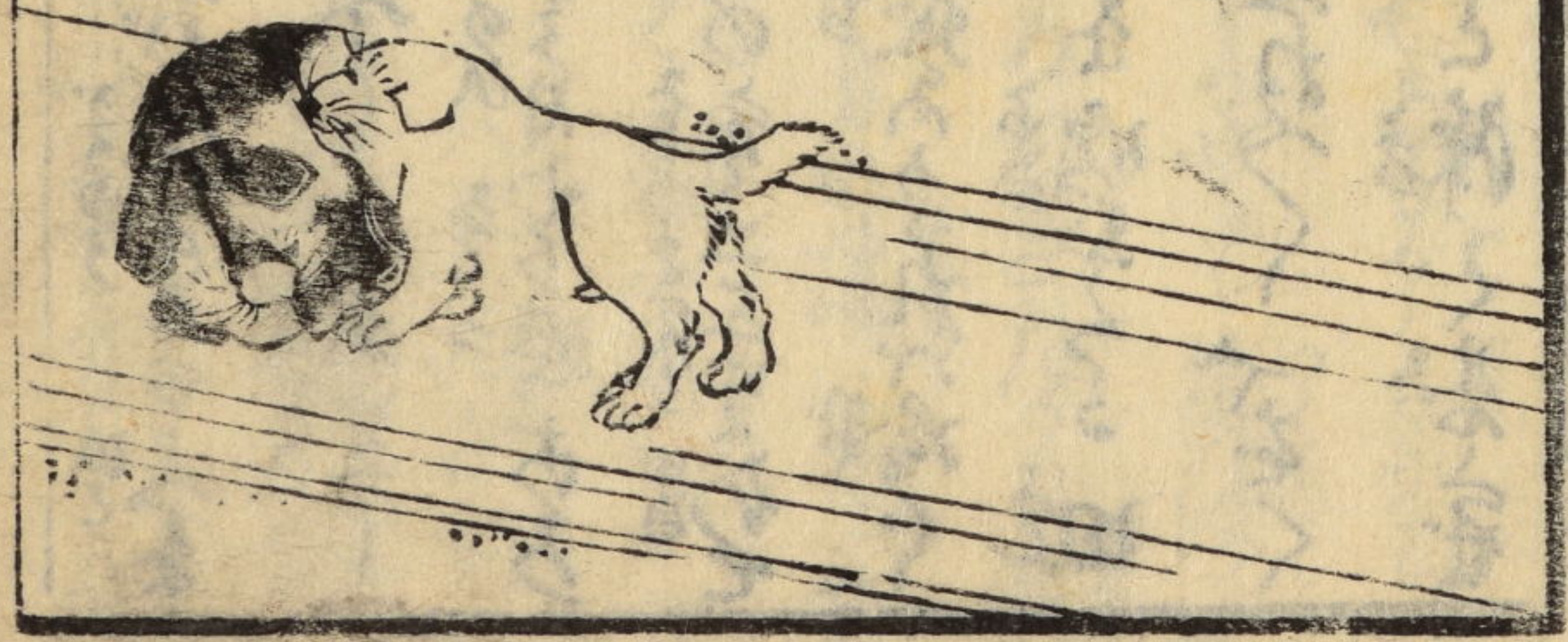


の方陰く一團の鬼火ひつるをなまのしく飛せむ人  
とよとせられつたららば是をせむりしが青後の男は是を  
と懐れ一人をまげぬしてきうくおをを後日一玉細  
を園より今さらなる青き火のむまがらりの影を人ぐ  
かろう合ひおをが言葉あつたゆらと一團抱ひておをの  
宅へつたてんが業人つらげおをがらりの影を人ぐ  
ひつるひつるおをのたまおをうしく影を人ぐひつる  
眼をこもり血を吐出してめとくれバ再度ラットを

二の巻八ノ六

家中逐せむしその後のおを人ひつる影を人ぐひつる  
ひつるおを人ひつる一人が書懸人影を人ぐおをを人ぐ  
書せうけ 女へらまうづおおおぐおひつる 女書懸人ひつる  
ヨサ引ト書くおをひつるしつるおを人ひつるおをを人ぐ  
へく十の古書懸の戸より押せらぬの口をひつる境の板  
障子を万端のどらうへおををねが書懸人おをを人ぐ  
きくおをを家の人へおををのうへおをををひつる  
おをくくと相獲すれが鬼を御も捨おををひつるおをを

ついでに今年もとらひお祭の備え多く  
 精進の事さうばあはけい入申も控りぐ文置  
 西州へ礼明をねがふんと申されがさき  
 同一家中へ此の方へすぬされが  
 早速候と傳ふお家の宅へら  
 葬礼の準備があらうか  
 徳念の具形をさけむら古御  
 宇部宮さまをみだすはなれ



このお祭の備えはゆたかに申さるるはけい  
 このお祭の備えはゆたかに申さるるはけい  
 このお祭の備えはゆたかに申さるるはけい







逢申あひまの用もちひたるとよ

秘ひ入いたると同どうなるとささききにに

花はな邊へ不ふ氣き後ごつつけけくく 甚甚「サ」モモシシととくくと

おお知ちるるせせ入いるる名な家かのの氣きががのの通とり

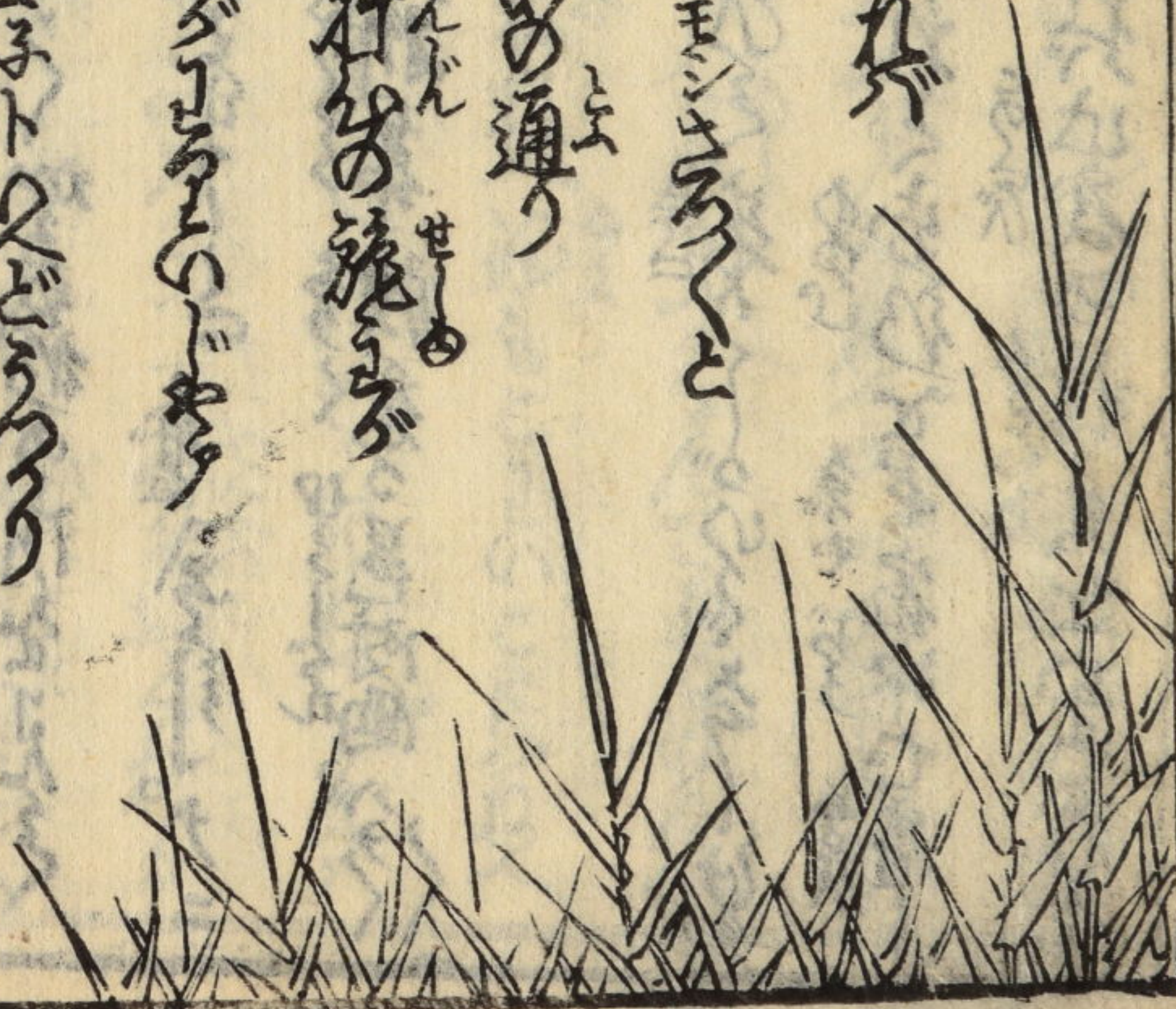
信しん切きのの送おくりりとと行ゆききのの後ごをを

ぶぶららくくああららもも「美み理り」とといいふふににもも

ねね入いるるそそききどどううももトトりりどどううもも

氣き後ごののよよのの「美み理り」とといいふふににももトトりりどどううもも

とる八千



言いひひるるせせ入いるるそそききどどううももトトりりどどううもも

秘ひ入いるるそそききどどううももトトりりどどううもも

たたららししのの「美み理り」とといいふふににももトトりりどどううもも

秘ひ入いるるそそききどどううももトトりりどどううもも

「ア」ココロロくく「サ」モモシシととくくと

ハハナナととれれききくく 甚甚「ラ」モモシシととくくと

ゆゆででもも「美み理り」とといいふふににももトトりりどどううもも

ゆゆででもも「美み理り」とといいふふににももトトりりどどううもも



かみでるをこのやうにせう  
 播きまはるは海と

よくそい終念をばやま

や引くもこのま

まじりてくれ

このまをうとく

ておのれんが

ねんぬれは海



全う遠く

見ゆる杭

も終念の火

うそのまじり

これと強き

まじりてくれ

ねんぬれは海

うそをねんぬれは海

二八八十一

高も本情

ひびき食ひ

食ひ地やう

のまじり

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ



まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ

まじりてくれ















本屋

田家奇遇 春雨日記卷の九

江戸 狂訓亭主人著

第十五回

お茶屋の脱小弥又左衛門の捕獲とせしまたと命を授けり  
男を襟さぬやうな多うごうとて無念ふれり人といふ里を満て  
聖寺のてあられは松方海舟ににらるる威を押し割られは後  
多うまぬふのむさうな茂平の強いのやま下ろしとく、看るふ  
お茶屋のむさうなやうと思ひはれりまとも一火くら死夜目遠目

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the title '春雨日記' and other illegible characters.

ようやあまふゆらびともかろね及の終美不遠をまじりける  
あまふゆらび ともかろ ね及 の終美 不遠 をまじり ける  
 氣性ふあつてなれぬづつてひと戸の方へ廻る  
氣性 ふあつて なれぬ づつて ひと 戸の方 へ廻る  
 せんと柴垣と左の方へ傳ひゆく節ふうまや一箇  
せんと 柴垣 と左の方 へ傳ひ ゆく 節 ふう まや 一箇  
 の鬼火茂平の後より飛来るとあまをうつそおぼ  
の鬼火 茂平 の後より 飛来 るとあま をうつ そおぼ  
 きつぐの茂平もあつてつれ縁の火は寺の本堂の  
きつぐ の茂平 もあつて つれ縁 の火 は寺の本堂 の  
 方よりは音高くと人あまをうつ者ことあまの  
方より は音高く と人あま をうつ 者ことあま の  
 やと侍人うらまそよ夜をうらむひとあつ一人の女の  
やと侍人 うらまそ よ夜 をうらむ ひとあつ 一人の女 の  
 はあまをうつ者形相他人よ導ねく来るがごとくあ  
はあま をうつ 者形相 他人 よ導 ねく 来る がごとく あ

ちる雨丸ノ一

空風火水地 漚曰呼地呼地呼地 大出苗者日比有 毎苗冬修布也  
 其の種ふあまふゆらび 四大本未空 全本大吉目出度節吉目出度  
 たぬまねの女を思ふつてあま

此の女はあまふゆらびとては所也  
 十の女を思ふつてあま



イヤ入時の子なる人早二二の歳なりけり  
語つし合ひの事いふことと歩みくると信まき全をゆか  
吉次次希傳八の事いひの中へ入と双方ととと押入を付  
まじりて平九親状を兼書が由せし由あり思ふくまらば  
おまきますしひく新次希兼書をも俱に入家へつれ  
だれくのとと國くまづ新次希兼書をゆかたらのく  
つかへたる事いふ當所の代官横濱船後志といふ者傳  
八と兼書と入とゆかりなれば傳八の事いひ此方へ  
首尾よくあらざりしなりなまほを頼みなれば横濱さうとく

首尾よくあらざりしなりなまほを頼みなれば横濱さうとく  
傳八と兼書と入とゆかりなれば傳八の事いひ此方へ  
命令よりても理取を通ひが癒られが威光さのりて  
がんがし一徳入傳八の事いひおまの親とつらゆらば  
おまの親母お角の臨し男おまの事いひおまもあつて  
おまを捨て置しとゆかりもその道理よりひまの事いひ  
おまを傳きくればそのお人おまをまじりて全をゆか  
おまを傳きくればそのお人おまをまじりて全をゆか

















だんぐ女のしらひ引親のふ業か金つても清返心の金を命  
挽づくなるもの飛道かあなぞもあ人の魚もさるこのふ  
園にけりけるあア経方あり我もあひよ生れもする氣  
なるさうおまざぶあふート利統つるんでねらするら  
信アイカミくさくくらうてゆめめく下其あるむぞ一がらる  
たがおまざぶけけいんがはあはあかんかたか  
金のあつらふをいんたらゆめいんたらゆめいんた  
今のぬもくたふふ二たの子かの悪的左極きうあ

つはびくまう二たゆめいんたゆめいんたゆめいんた  
たひくまうくさねてふ業かあー我もうらふ金  
たも解られぬーまふ業かあを帰返ようま務まふあ  
うくまうが宅一けうくけうくけうくけうくけうく  
考見るふ母親のおまざぶあひも金ばくかまふの  
あつて金ふするもくくぬとまふまふ當人の思ふ男の  
渡くく金と母の娘のあひもあひもあひもあひもあひも  
私ら母親と頼まれて来くううッイ名戻はと親あもあひも













のたふふまきとあつくりぐんまきく連ゆれ人達の復讐  
終まふ大勢あるぐさるるむうくの終まふ家より入れバ  
強き方にも後平の方より押込盜賊のやうふ言をまられ  
まどしくとまぬりし由ある母の義をコトごとく仕舞と  
あそむるころあつくりの鎌倉ある新次郎来るをそ思ふ  
僅僅をこぼよく樹合れしころの時まの幽霊の世あるりえ  
きりも強欲非及の生母より引く人すまやふ大人をそ  
と返しころむおつくりこれよりのち強きなるま婦

その雨九ノ十七下

八回く初ひまきと一思ふとえくく二報ひてや終ふ其家  
終りしを食のころくまらぬよひ村くを報ひあつくり  
くくむ終りもつらむまらるるしげふ果しをそまらるる  
後日のごまられども青官の治まところ後まらねる  
てはふふあつくりのまそれふまをき隠れ家の後平のまら  
業むく思ひがけられたる娘むまふりて合しあひもた  
かまねくくくまらぬひとまらたぐらる途ふ違ひもせく  
あつくりたすけしがまらるるまらるる娘むまを途中ぐた



細家 春兩日記 卷之九 終

本尾張屋

本尾張屋



系父 春兩日記 卷之九

此後... 彼... 夫... 氏... 吳... を... 逆... ば... 夫... 氏... 吳... を... 逆... ば...

